

【追悼文】

八木博司先生を偲ぶ

医療法人 八木厚生会 八木病院 脳神経外科 三谷昌光



当院、八木病院の理事長・院長の八木博司先生が平成30年4月23日逝去されました。89歳7か月の大往生でした。九州のみならず、日本の高気圧酸素治療の発展に多大の貢献をされました。高気圧酸素治療と巡り合い一生を捧げた先生の偉大な人生についての学問的な部分は第19回九州高気圧環境医学会誌に発表しましたのでご参照下さい。ここでは先生に約25年間師事した者として、先生とのエピソードを交えて紹介し偲びたいと思います。

昭和3年(1928)9月16日 初代は黒田藩御典医で代々医業を営む八木家の第14代として生を受けられ、昭和28年(1953)に九州大学医学部を卒業され1年間のインターンを終え、翌29年(1954)九州大学第2外科へ入局され外科医としてのスタートを切られました。血管外科のテーマのもと研鑽され、昭和39年(1964)より2年間米国へ留学されました。なかなかビザが下りず苦労の末の留学だったそうです。この時高気圧酸素治療(Hyperbaric Oxygen Therapy; HBOT)との運命の出会いがあったそうです。HBOTによりブルーベビーが蘇る場面に出くわし大変感激されたとの事でした。HBOTの夢を抱いて帰国されたわけです。

帰国後は大学に留まり臨床・研究に活躍されました。しかし父逝去の為、家業を継ぐべく昭和45年(1970)八木病院院長として帰院されました。帰院の翌年、昭和46年(1971)には夢であったHBOTを早速開始されました。最初、動物実験用に作った自家製の高压チャンバーを臨床用に改良し、八木先生自身が実験第1号となりチャンバーの中に入って安全性を確かめた後臨床応用したとのことでした。昭和52年(1977)にはタバイ製の一人用HBOT装置を導入、しかし一人用では物足りず昭和58年(1983)多人数用の大型HBOT治療装置を導入されました。当時の1億5千万円という資金を投入することについては、「他にやる人がいなければ儲かるだろう」との安易な考えだったそうです。このように病院経営には無頓着は方でした。しかし時間厳守で約束の10分前には来ておられますし、検査結果表は係がカルテにきちんとズレなく貼っていないと気に食わず自らの手で貼ってある場面(時には剥がして貼り直す)を何度も目撃しました。

第2種装置の導入により臨床応用の幅は広がり、臨床・基礎研究にも益々精力的に取り組まれました。平成2年(1990)には実験用小型チャンバーも導入し、開業医でありながら種々の基礎実験に取り組まれました。その成果は、平成4年(1992)に460ページに及ぶ論文集「八木病院における高気圧(HBO)酸素療法に関する論文集—20年間の歩み—」(陽文社より自費出版)にまとめられています。

学術・学会活動にも熱心で、関係学会の理事・評議員を歴任されました。特筆すべきは、昭和61年(1986)11月、第21回日本高気圧環境医学会総会を福岡の地で開催された事です。

前年の沖縄開催に次いで九州の地で全国大会が開催されたのを機に昭和63年(1988)、八木博司先生、川嵜眞人先生、湯佐祚子先生等を中心に九州・沖縄地区高気圧環境医学懇話会が発足しました。沖縄での酒の席で懇話会設立への決起がなされたそうです。手作りの会で、この学会の事務局のお世話を長く務められました。第7回懇話会の際、研究成果を論文集としてまとめることになり、平成3年(1991)九州・沖縄地区高気圧環境懇話会誌第1号が発行されました。平成12年(2000)、学問的価値を上げる為「日本高気圧環境医学会九州地方会」へと昇格、さらには平成19年(2007)現在の「九州高気圧環境医学会」へ、平成30年(2018)19回目の開催となり発展しています。御安心下さい。

感謝と共にご冥福をお祈りいたします。